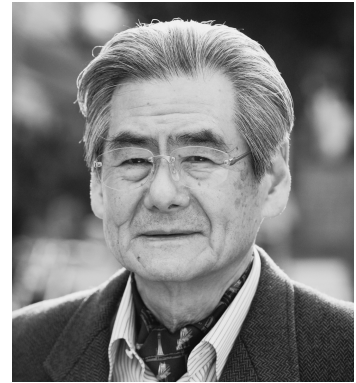


国際化の波を作ろう

原田仁平 (名古屋大学名誉教授, JPH 研究所)



昨年の6月、私は定年後長い間勤めさせてもらっていた俵リガクを退きました。やや自由な身を持って余すようではと思って居りましたが、JSPSの145委員会の名誉会員にして頂いたこともあって、その研究会には出席したり、また産業界に顔を出していた恩恵から、異業種のOBが集まる研究会に顔を出したり、JSTが東京の近郊で催す研究会にも出席していると、意外に余裕ある時間を作るのは容易ではないことが解りました。そんな状況にあったこの年頭に「巻頭言を書いて欲しい」との手紙が自宅に舞い込んできました。

果たして、お引き受けして良いものか迷いました。しかし、大変名誉に思いますので、お引き受けしました。いざ書き始めようとする、今度は学会が何を求めて私を指名して下さったのか、考えざるを得ない状態に陥ってしまいました。日本放射光学会が出来た初期に私は評議員を務めさせて頂き、年に一度開かれる講演会を名古屋で開いた折にお手伝いした程度の寄与しかしていませんので。

私が若いころ、大学院の院生から研究室の助手として働き始めたころの話から始めます。それは1961年頃の話です。昼には教授室に集まって皆で昼食を取りながら雑談したりするのが常でした。その様な折とか、実験をおえて一緒に帰宅する時に寄り道をしてビールなどを口にている折りなどに、研究室の恩師、本庄五郎先生は口癖のように我々若者に向かって促していた言葉があります。それは、大学の教官たらんと志す者は、海外に少なくとも2年以上は留学して学んで来なさいと言うことです。さもないと国際感覚の無い研究者で終わることになりますよと。戦前の教授はその様にして国際感覚を身につけて来られたこと。そして身近な先生として、阪大に居られた仁田勇先生の名を上げられ、多くのお弟子さんを育てられ、京都で開かれた国際磁気結晶学会議で来日された海外の研究者とごく普通に接し、独創性のある仕事をアピールする姿勢を尊敬しておられました。戦時中は海外留学の機会は今も考えられず残念である由も漏らしておられました。ご自身では出来るだけ海外の講演会に出られ、其処で得た情報を我々若い者に伝え、議論をするように努められておりました。

国際的な研究集会、Workshop or User Meetingsに参加することの大切さはこの様に昔から語られて居ることです。その場では理解できない事が多々あるものですが、海外で得た知人とのロビートークを通して意見交換が出来るからでもあります。また、解らない話題は宿題として持ち帰り、研究室で議論することもできます。それはむしろ教育効果を上げることにも繋がるでしょう。それが研究室内の若い者に刺激を与え、思わぬ方向で発展することさえあるからです。私自身、その様な良い経験を幾つか持ちました。

島国である日本ではこの国際化の問題は昔も今も変わらず心せねばなりません。明治の初期、先進者の間に、明治以前に語られた「和魂漢才」なる言葉をもじって「和魂洋才」なる標語を造り、叫んだ様です。ですからこの問題は島国の宿命と言えるでしょう。私は今なお「和魂洋才」を叫ばねばならぬと感じています。

そこで、何か仕組みは出来ないものかと思案し、通常、3日間開かれる日本放射光学会の年会に次のような特別 Session を設けては如何かと思ひ至りました。学会がトピックスを選んで企画し、特別講演も含めて、国際的オーラルセッションを半日ほど開いてはどうでしょう、何時も年会には International Workshop を併用して国際化を図ると言うことです。

Invited speaker の内何人かを海外から呼び、同時に学会の宣伝も怠らず、海外からの contributor を受け入れては如何でしょう。もっと具体的には3日ほどの年会のうち、半日ほど海外からの研究者を交えた国際的な Session を慣例として催す様にしたらと思う次第です。近隣国に宣伝すれば、その Session を聴講するのを目的に、ついでに Poster Session に論文を出してくれる海外の若手も増えるかも知れません。学会を交流の場として、日本の大学に研究生として来たいと思う者も増えるのではないか、国際化が叫ばれている今、その波を作れるかも知れません。財政の問題はつきもので、困難は予想されますが、JSPS などに予算の申請をしてみてもはと思う次第です。

この辺まで書いて、終わろうとしていると SRN という雑誌が届きました。ページをめくると G. Nail の Guest Editorial で始まり、幾つかの Meeting Reports があり、Technical Reports があって、Calendar が出て終わりになります。一年ほど前から企画すればこの欄を利用して宣伝も出来るでしょう。しかし、今回の SRN に現れた記事全体が日本の SR 活動とは無関係のようなのは、私にとって気になることの一つです。